様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007 ～ 2009
課題番号：１９７２００１４
研究課題名（和文）版本と異なる日本古写経中の漢訳仏典研究
ー『五王経』『普賢菩薩行願讃』を中心にー
研究課題名（英文）A Research on the Manuscript Version of Chinese Translation of Buddhist Scriptures Different from their Printed Versions: *the Wuwang jing* and *the Puxian pusa xing yuan zan*

研究代表者
林寺 正俊（HAYASHIDERA SHOSHUN）
国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員
研究者番号：60449361

研究成果の概要（和文）：
近年の寺院調査とそれに基づく研究により、わが国に残されている古写経の中には、版本（版木による印刷版）と全く同一の経題を冠していながらも、その内容が版本と大きく異なるものも存することが判明してきた。
そこで、本研究ではこのような古写経の中から小乗経典の『五王経』と大乗経典の『普賢菩薩行願讃』を取り上げて検討し、版本に基づく従来の漢訳仏典研究だけからは知ることのできない仏典伝承の新たな様相を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The recent first-hand investigation of Buddhist manuscripts preserved in Japanese monasteries has made it clear that some manuscript versions of Chinese translation of Buddhist scriptures are largely different from their printed versions in terms of contents, even though they all have exactly the same title.
Focusing on two scriptures among those of the above-mentioned kind, that is, *the Wuwang jing* and *the Puxian pusa xing yuan zan*, I clarified their aspects which had been unknown from research based on printed versions alone.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	0	1,200,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	390,000	2,890,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・印度哲学仏教学
キーワード：仏教学、日本古写経、『五王経』、『普賢菩薩行願讃』、音写、不空、慈雲、金剛寺

１．研究開始当初の背景
近年、数多くの古写経を有する寺院の調査とそれに基づく研究によって、日本の古写経の中には版本と同一の経題を冠しながらも中身が異なっている仏典がしばしば含まれており、まさにその異なっている古写経の方が本来の姿（古態）を留めていることもあるということが判明してきた。当科研費の研究

代表者（林寺 正俊）は、写本一切経の調査・研究を推進する国際仏教学大学院大学の学術フロンティア（プロジェクト名「奈良平安古写経研究拠点の形成」）の研究員（2010 年３月末まで）であるため、古写経資料へのアクセスが比較的容易であり、かつインド仏教を本来の専門としているため、インド仏教との関連を視野に入れた上での検討が必要と判断される漢訳仏典の古写経本を研究しようと企図した。

２．研究の目的

本研究は、経題が同一でありながらも版本とは異なる内容を有する日本古写経のうち、インド仏教と深く関連している二つの経典、すなわち小乗経典の『五王経』と大乗経典の『普賢菩薩行願讃』の全容を総合的に解明することを目的としている。具体的には、従来の研究で用いられてきた版本系のテキストと、今回新たに資料として活用する古写経系のテキストとの間に見られる相違を明らかにし、さらに、その相違の生じた理由・背景・周辺事情などを解明することを目指す。

３．研究の方法

本研究を進めるにあたっては、最初に以下の基礎作業が必要となる。すなわち、

・当該漢訳仏典の古写経本を所蔵する寺院（大阪府河内長野市の金剛寺、愛知県名古屋市の七寺）における実地調査
・デジタルカメラによる古写経本の撮影
・当該古写経本の翻字

である。これらは『五王経』『普賢菩薩行願讃』の両経典に共通する必須の基礎作業であり、この基礎作業を経たうえで、それぞれの経典について以下の研究方法を採用した。

(1)『五王経』

古写経系テキストと版本系テキストとの比較、両テキストの間に見られる相違の明確化、かかる相違が生じた理由や背景の解明

(2)『普賢菩薩行願讃』

漢字による音写だけから成る金剛寺本の翻字とサンスクリット原文との比較対照、漢字とサンスクリット語との対照語彙集（Glossary）の作成、『普賢菩薩行願讃』の日本所伝サンスクリット本を出版した江戸時代の悉曇学者慈雲（1718-1804）の諸著作における関連事項の検討

４．研究成果

上述の基礎作業および個別経典ごとの作業により、それぞれの経典に関して以下の研究成果が得られた。

(1)『五王経』

本経は分量的には短いものの、世俗的な享楽の無常を説き、かつ苦しみの有り様を非常に具体的に描写しているため、日本の古典文学作品にもしばしば引用されるほどの大きな影響を与えてきた経典であるが、寺院調査の過程において、本経の高麗再雕本や宋元明などの版本系のテキストと、金剛寺と七寺に所蔵される古写経系のテキストとが幾分異なっていることが判明した。両系統の間に見られる相違は、具体的に述べると、以下の３点である。

①八苦（生苦、老苦、病苦、死苦、恩愛別苦、所求不得苦、怨憎会苦、憂悲悩苦）の配列順
②訳語
③訳文の広略

以下順不同ではあるが、これらの３点について簡潔に述べていこう。

②訳語については、例えばサンスクリットの srota-āpatti という語に対して、古写経系ではこれに「道跡」という語を与えているが、版本系は「道跡」と「須陀洹」という二つの語を併用している。同一文脈内において一つの原語には同じ訳語を当てるのが普通であることからすれば、版本系には編集の手が加えられていることが推知される。

③訳文の広略については、版本系の方が古写経系より 310 字分ほど多くなって詳しくなっている。ただし、両系統には訳文の共通する部分も非常に多いことから、どちらか一方が他方を編集して成立している可能性が高いと推察される。そこで、版本系の本文内容を委細に見当してみたところ、版本系の方が詳しくなっている原因の一つとして、老苦・病苦・死苦の三苦の説明箇所に、時代的に先行する支謙訳『八師経』の一部がそのまま編入・援用されていることが判明したのである。まさにこの『八師経』の編入によって、版本系には文脈的な不自然さや本来の文意の変容などが起こっている。いずれにせよ、『八師経』という別の経典を流用している事実からも、版本系が編集されていること、かつ古写経系の方がテキストの内容としてはより素朴・本来的で、編集が加えられるよりも前の形態（古態）を保っていることが知られるのである。

①八苦の配列順については、版本と古写経のそれぞれの系統に記載される配列順は、南伝のパーリ文献や説一切有部をはじめとする北伝系の経論、漢訳大乗仏典の中に広く求めてみたが、結果的に完全に一致するものを一つも見出すことはできなかった。この問題

に関連することであるが、版本系のテキストが中国での編集作業を経ていることは上述した通り確実であるにしても、版本系の下敷きとなった種本の古写経系『五王経』も果たして中国で作られた疑偽経なのか、それともインド語原典を想定し得るような本当の訳経（真経）であるのかという重要な問題は未解決のままである。この問題は今後さらに別途に検討しなくてはならない。

(2)『普賢菩薩行願讃』

金剛寺には重要文化財に指定されている梵漢『普賢菩薩行願讃』とは別に、一切経の中にも『普賢菩薩行願讃』の写本が２本（いずれも同系統）含まれている。しかし、この２写本はこれまで知られていた漢訳テキストのいずれにも該当しない未知の新出資料である。

他寺にも当該金剛寺本と同じ系統の写本がないかどうかを確認するため、七寺（名古屋市）所蔵の『普賢菩薩行願讃』についても実地調査を行ったが、結果的に、金剛寺本と同じ系統のものではなく、版本系のテキストと同じものであることが判明した。

ところで、この新出の金剛寺本の特色は、以下の４点にまとめられる。

①「普賢菩薩行願讃」という冒頭の経題を除いて、すべて漢字による音訳である。
②サンスクリットの詩節ごとに漢数字が割注に付されている。しかも、全 62 偈から成るサンスクリット原文のうち、内容的には決して区切りの良いところではないにもかかわらず、第 14 偈までを音写したところで突如として終了している。
③『普賢菩薩行願讃』の現存サンスクリットとしては、ネパールに伝わった北伝系と南インドやスリランカに行われたと推定される南伝系とに大別され、両系統の間には偈頌の配列や言語などの点で相違が見られる。金剛寺本の音写漢字をサンスクリット原文に対照させて音写語の区切りを明確にしてみると、金剛寺本は不空（705-774）訳の基づいた南伝系のサンスクリットの方に一致している。
④音訳の文字列の合間に割注が挿入され、しばしば反切によって発音が明示されており、さらにサンスクリットの音写字ではない「打」という語が三箇所に記載されている。この「打」は儀礼において何かを打ち鳴らす行為や作法などを示していると推定される。

また、日本に伝わった『普賢菩薩行願讃』のサンスクリットを蒐集した江戸時代の悉曇学者慈雲（1718-1804）の著作を調べてみたところ、『普賢菩薩行願讃聞書』という弟子が書き留めた慈雲の講義録中に、ほぼ同じ漢字音写が掲載されており、しかも驚くべきことに、その漢字音写も第 14 偈までで終了していることが判明したのである。管見の限りでは、これが日本仏教史上において金剛寺本と同系統のテキストの存在を確実に裏付ける唯一の資料である。しかしながら、この中で慈雲は「第 15 頌以下の音訳は広く探しもとめるべきである」とも述べており、彼自身もこの音訳テキストの素性について詳しく把握していなかったことが知られる。

現時点では、当該金剛寺本の音写テキストは、中国における密教の大成者と評価される不空本人か、あるいは彼のいずれかの弟子によって作成されたものではないかとの仮説を持つに至っている。その根拠は、金剛寺本の音訳が第 14 偈までとはいえ、不空訳の依拠した南伝系のサンスクリットに完全に一致していること、不空門下でサンスクリットに精通していた慧琳（737-820）にも「普賢菩薩所行行願讃」という別種の音訳本があること、さらに不空自身が弟子達に『普賢菩薩行願讃』の誦持を勧めていたこと、などである。今後はこの仮説を様々な角度から検討・検証していく必要がある。

ちなみに、金剛寺本の音訳漢字の全文翻刻は、慈雲講義録中に掲げられる音訳とサンスクリット原文とを併記したうえで、偈頌の節ごとに区切って、下記の雑誌論文②の中にすべて掲載した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①林寺 正俊、「日本古写経と『八師経』から見た版本系『五王経』の編集」、『印度哲学仏教学』第 23 号、査読無、2008 年、61-73 頁。
②林寺 正俊、「金剛寺の新出『普賢菩薩行願讃』サンスクリット音写本」、『印度哲学仏教学』第 24 号、査読無、2009 年、83-102 頁。
③林寺 正俊、「從日本古寫經與《八師經》看版本系統《五王經》的編輯」（中文）、『藏外佛教文獻』第 14 輯、査読無、印刷中。

〔学会発表〕（計２件）

①林寺 正俊、「金剛寺蔵『普賢菩薩行願讃』について」、北海道印度哲学仏教学会第 24 回学術大会（札幌：北海学園大学）、2008 年 8 月 31 日。
②林寺 正俊、「日本古写経中に見られる『普賢行願讃』の新出異本」、2008 年日台共同ワークショップ「仏教文献と文学」（台湾：嘉義南華大学）、2008 年 10 月 24 日。

〔その他〕　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
林寺　正俊（HAYASHIDERA SHOSHUN）
国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員
研究者番号：60449361
(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし